手と手と手

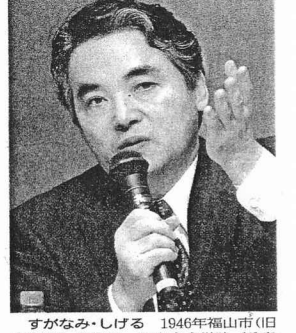
岡山発 国際貢献

山陽新聞社は五月二十八日、朝刊一面へ連載中の「手と手と手」岡山発 国際貢献」に連動したシンポジウム「地方からの国際貢献を考える」を、岡山市駅元町の岡山コンベンションセンター（ママカリフォーラム）で開いた。連載が終盤を迎えるに当たり、総括討論的位置づけの下、作家の神津カンナさんの基調講演とそれを受けてのパネルディスカッションが行われた。神津さんは、先進国に暮らす人間が抱える矛盾や国際貢献へ向けての心の持ちように言及、パネルディスカッションでは、星野俊也・大阪大大学院国際公共政策研究科教授をコーディネーターに、五人のパネリストが地方発の国際貢献をめぐり意義や展望、課題などについて意見を戦わした。文中敬称略。

つながる世界

シンポジウム「地方からの国際貢献を考える」

■パネリスト（順不同）
菅波　茂さん（国際医療ボランティアＡＭＤＡ代表）
内野　淳子さん（岡山県副知事）
阿曽村邦昭さん（吉備国際大大学院国際協力研究科長）
仲田　永造さん（高梁ロータリークラブ元会長）
鹿嶋小緒里さん（岡山大大学院環境学研究科生）
■コーディネーター
星野　俊也さん（大阪大大学院国際公共政策研究科教授）



すがなみ・しげる　1946年福山市（旧神辺町）生まれ。岡山大大学院（公衆衛生）修了。岡山大病院勤務など経て、81年、岡山市楢津に菅波内科開業。大学時代のアジア歴訪経験を基に、84年、ＡＭＤＡ（アジア医師連絡協議会）設立。緊急救援活動で実績を積み、現在はアジアを中心に29支部を率いる。著書は「ＡＭＤＡの提言」など。

菅波さん　精神風土が支えに

一九八四年にＡＭＤＡを設立し、多国籍医師団を世界各地へ派遣してきた。大きな緊急救援プロジェクトとして過去三回、岡山空港から救援機を飛ばし、災害被災者の手元まで物資を届けた。九五年ロシア・サハリン大地震、九六年中国雲南省地震、そして二〇〇一年のインド西部大地震。このときは、がれきの中に閉じ込められた人が多数いるとの情報を聞き、パワーショベルを運ばなければと発作的にロシアの航空会社から輸送機をチャーターした。広く寄付を募って物資を集めるための期間が三日間しかない上、九五年の阪神大震災で燃え上がったボランティアの機運がどこまで残っているか、大差なかけだった。結局、岡山県のロシア・サハリン大震、九六年中民を中心に毛布など多くの善意の品をいただいて満足できるだけの物資を調達できた。このように弱者が存亡の危機に瀕した時に動く、という岡山県の精神風土に支えられ、ＡＭＤＡの活動は続いている。

あそむら・くにあき　1935年秋田県生まれ。米国アマースト大政治学科卒。60年、外務省入省。ベトナム、チェコ・スロバキア、ベネズエラの各国大使など歴任。退官後、ＮＰＯ法人日本紛争予防センター所長、麗澤大客員教授など経て、2006年４月から現職。日本・ベネズエラ協会会長、公設国際貢献大学校教授なども務める。

阿曽村さん　人材送り出したい

外交官として国を代表する立場で経済協力や援助にかかわり、退官後はＮＧＯ日本紛争予防センターの責任者を五年にわたり務めた。異なる二つの立場から国際貢献を経験してきた。外交官時代は機材供与や技術者派遣など行う場合でも、国同士の協定をまとめるなど、事業の道筋を付けるまでが仕事。実際に現場で動くのは別の人で、自分が直接手がけている感覚は薄かった。一方、ＮＧＯでは何をするのも全部自分たちの手で行い、国際貢献の現場を肌で感じた。その代わり事業規模は国の場合よりも小さい。今年四月、吉備国際大が設立した大学院国際協力研究科（通信制修士）の初代科長を務めることになった。岡山は、国際貢献分野で活動しているＮＧＯが四十を数え、県自体も国際貢献に熱心な日本の中でも特筆すべき地域と言ってよい。私たちはこの地から国際貢献にかかわる人材を送り出す試みに取り組んでいる。

■連携へ

星野　今、いろんな分野で産官学の連携が進んでいるが、国際貢献においても、自治体、企業、大学、ＮＧＯ、市民が加わって連携すれば、それが一つの地域力になるのではないだろうか。

菅波　岡山がローカルＮＧＯの拠点となることを目指し、九〇年代から、県民運動として国際ＮＧＯサミットに取り組んだ。結果の一つが国際貢献条例だと思う。世界から必要とされる岡山になれば、すべてが活性化する力も生まれるに違いない。医療福祉の伝統がある岡山の精神風土も生きる。国際貢献は地域おこしだと考えている。ＡＭＤＡがこれまで多くの人に支えられて蓄えてきた国際的なネットワークやノウハウを地域に役立てていくことが、私の人生後半の仕事と考えている。

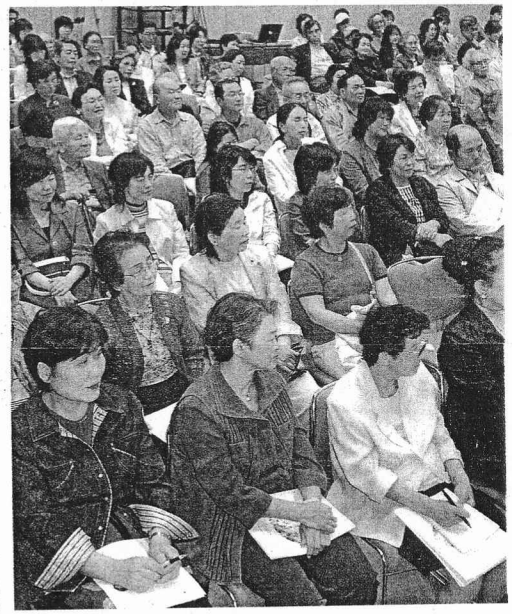
内野　岡山には、いろんな形で国際貢献をしている人たちの積み重ねがある。県は人材養成講座や救援物資の備蓄センターを設けるなど、多くの県民に参加いただき、成果も上がっている。ただ、さらに個人の参加を広げ、企業などに協力してもらうために県がどう働き掛けていくかは課題。県民と県民、そして相手国の人が手を結ぶ協働、これからの連携に向けて、県としては皆さんのご意見を聴きながら考え、行動していきたい。

阿曽村　日本には海外で貢献活動をしたいと思う人が大勢いるが、問題は、仕事を辞めなければ参加できない実態にある。そこで、企業や行政、大学は、再雇用の保障や休暇制度、単位認定という形で機会を提供することが求められる。そうしなければ、日本の人的資源は増えない。岡山県は、国と違って範囲は限られるが、実績がある。日本の模範となるような連携の体制を作りあげることができるのではないか。

仲田　活動を通じ、カンボジアの人々と連携でき、他のロータリークラブや地元高梁地域の皆さんとの連携も生まれ、友達が増えた。できないことは、いくら考えてもできない。「できることから一歩前へ」という精神でこれから取り組みたい。カンボジアの人が自分の足で一歩前へ出てくれるような支援をしていきたい。

鹿嶋　岡山大学は、ユネスコや地元の地域と連携し、持続可能な開発のための教育（ｅＳＤ）に取り組む準備を進めている。私自身は「現場で感じ、自分で考えて、行動する」をモットーに取り組んでいきたい。

星野　神戸に暮らし、大阪で働く私から見ると、岡山には、自然の恵み、心の広さ、生活のゆとりがある。この豊かさから、国際貢献が生まれたのではないだろうか。地方から考えるということは、中央任せにしないこと。つまり、自分から率先して行動することだ。最近、グローバル化という言葉がよく使われるが、かみ砕けば、自分と世界がつながっていることだ。市民にとって国は遠い存在で、生活に密着した政府は地方自治体。これからも岡山発で国際貢献活動がどんどん広がることを期待する。



仲田さん　故圓山氏の志継承

カンボジア・タケオ州プライカバス郡という地域で支援を行っている。始まりは、高梁ロータリークラブ（ＲＣ）第八代会長の故圓山興一氏による小学校建設。圓山氏は太平洋戦争終戦をカンボジアで迎え、現地の人の助けで無事帰国できたことを感謝し、カンボジア内戦終結後、現地を訪問して教育支援のために校舎を建設した。九八年に落成式が行われた際、高梁、新見ＲＣの会員も同行し、感銘を受けた。ところが小学校はできたものの、家庭が貧しく学校へ通えない子どもがいる。何とかせねば、と就学支援の里親制度を始めた。一定の成績を条件に、月十ドルの奨学金を支給する。間もなくＴＢになった圓山氏の志をＲＣ会員が引き継ぎ、今では多くの市民に参加してもらい百五十人の生徒に支給するまでになった。年一回の現地訪問で地域のニーズを把握し、学校以外の給水施設、日本語教室などにも活動の幅を広げてきている。

なかだ・えいぞう　1947年高梁市生まれ。関西医科大卒。倉敷市の病院勤務を経て87年に仲田医院開業。高梁ロータリークラブ会長を務めていた98年、カンボジア・タケオ州への教育援助を開始。他のロータリークラブと協力して水処理、医療施設整備など活動を広げている。現在、子どもの就学を支援するカンボジア里親会事務局長。

鹿嶋さん　第一線目指し学ぶ

国際貢献の第一線を目指し、岡山大大学院環境学研究科で学んでいる。志したきっかけはＡＭＤＡとの出合い。岡山理科大四年生の時、ＡＭＤＡのホームページ作成ボランティアサークルに参加し、本部事務所で職員の皆さんが活躍する姿に触れ、国際貢献にあこがれた。会社員になった九七年にはカンボジアで初めての現場を体験できた。アンコールワットの現場を体験できた。通信インフラの無い地域から災害情報を伝える実験だった。その後も仕事による津波被災地復興プロジェクトに参加して学ぶ試みで、学生ら四人が一チームとなり、仮設住宅周辺の水やゴミなどの衛生環境と、被災者の意識調査などを行った。

かしま・さおり　1974年高松市生まれ。岡山南高、岡山理科大理学部卒。ネットワークエンジニアとして岡山市内のＩＴ企業に勤める傍ら、技術ボランティア団体ＭＩＴ21に参加し、ＡＭＤＡのホームページ作成、遠隔医療プロジェクトなどに携わった。会社を退職して2005年４月、岡山大大学院環境学研究科に入学。専攻は国際保健。

基調講演

地球の上の小さな私
――神津カンナさん

こうづ・かんな　1953年東京生まれ。東洋英和女学院高等部卒。米国サラ・ローレンス・カレッジで演劇を学び、帰国後に出版した「親離れする子読む本」で作家デビュー。テレビ、ラジオなどでも活躍している。著書は「美人女優」「パープル・ドリーム」ほか多数。2005年からNPO法人ハート・オブ・ゴールド理事。JICA国際協力功労者賞受賞（99年）。父は作曲家神津善行、母は女優中村メイコ。

WHO（世界保健機関）によると、一人の人間が人間らしく生活するために必要な一日最低限の水の量は五㍑だそうだ。先進国の使用量は一人一日五百㍑。うち二百五十㍑は工業製品や食料品の生産に使われる仮想水（バーチャルウォーター）で、私たちは多くの目に見えない水を使っていることを知らなければならない。目に見える水は節約も可能だが、見えない水は個人の手に余る。「人は持てば持つほど不自由になる」というマザーテレサの言葉がある。私たちは自分ではどうにもならない不自由な状態を抱え込んでいる。

地球の水は太古から循環しているが、先進国は、大量生産・大量消費・大量廃棄という循環でないやり方で、地球を傷つけてきた。先進国は地球のシステムに背いているということも知っておかなければならない。

国際協力を考えるとき、気を付けなければいけないことがいくつかある。

私の父は何かの折に、既成概念や先入観を壊してくれる、違う角度から物を見ることの面白さ、難しさは父から教えられた。ある時、「上はどうだ！」と父が尋ねるので、自分の頭の上を指差したら、「お前は視野が狭い」と父。「地球上の人間が同時に自分の上を指差したらどうなるか。ウニの殻みたいになるんだぞ」と言われ、私は言葉をなくした。

私たちは、物事を違う角度から見なければいけないことを知っているし、その術も知っている。けれども、本当に違う角度から見ているかとなるとそうでもない。少し視点を変える、少し違う角度で考えることで、見えてくる新しい物は無限に広がる。そのことを厭わない人間であり続けることが、国際人になることだと思う。

自分の頭で考えたり、心の奥深くで感じることも大切だ。

情報があふれる今、私たちは受け止めることに一生懸命で、受け止めたものを飲み込まなくなっている。大の呼吸みたいに、情報を入れたら、出して、入れたらと、吐いての繰り返し。せめて何回か反すうする時間を持つべき。また、今は天気でさえ、テレビやインターネットの画面から教えてもらう。日常生活で絶えず考えたり、五感を使ったり、知識を経験員する中で培う考えるトレーニングは、人間の基本力となる。それがあるから、難しいことが出てきても考えることができる。天気ぐらいは自分の目で見て考えよう。新聞でニュースを知ったらテレビのニュースキャスターのコメントを聴く前に自分の頭の中で考えてみよう。自分の頭を使って物を考える時間をあえて取り戻す努力が必要だろう。

すべての水が循環しているように、水をみんなで共有しているように、世界と自分がつながっているという認識を持つことも大切。というのも、日本の食糧自給率は40％、エネルギー自給率も原子力発電を除くとわずか4％にすぎない。脆弱な日本は、いろんな国から社会貢献、国際貢献をしていただいている国ともいえる。私たちは何ができるかを考え、いろんな国と手を結んでいかなければならない。

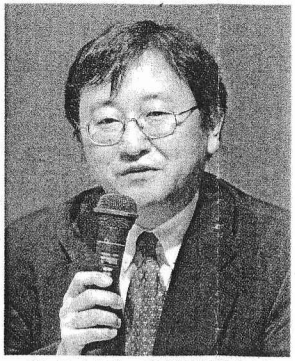
世界には何気なく一日を過ごせない人が大勢いる。私たちが一日をむだにしない、おろそかにしない気持ちを持つことは、大変なところに生きる人の一日に対する敬意。それをおろそかにしたら、いつか私たちの一日もおろそかにされる日がくるのではないだろうか。

国際貢献・協力とは、地方も中央もない。国境も関係ない。水と同じように循環している。国際貢献は、自分自身が発信地という気持ちで取り組むべき問題だ。大きな行動も必要だが、自分が本当にいろんな角度から物を見ているかどうか、本当に心の奥底で感じているかどうか、自分の頭で物を考えているかどうか、国際貢献に取り組む時には、もう一度自分に問い直してもらいたい。国際貢献の基本は、そういう物の見方をする人間のまさざしだと思う。私は、そういう自分をつくるということに精いっぱいの努力をしていきたいと。

シンポジウム「地方からの国際貢献を考える」

巡る協力 自分が発信地に

友通じ実感



ほしの・としゆ　1959年群馬県生まれ。東京大大学院修士課程修了。在米日本大使館専門調査員、米国プリンストン大客員研究員など経て、2003年から現職。国際連合学会理事、日本平和構築ネットワーク代表なども務める。専門は国際政治学、国際安全保障・危機管理論。著書は「紛争と復興支援」（共著）ほか。

うちの・じゅんこ　1956年東京生まれ。東京大教養学部卒。81年、旧労働省入省。91年から2年間、岡山県国際交流課（現・国際課）長を務め、海外技術研修員の受け入れなどに携わった。労働省大阪女性少年室長、広報室長、内閣情報調査室内閣参事官、厚生労働省短時間・在宅労働課長など経て、2004年7月から現職。

内野さん　県民の思い生かす

九一、九二年に岡山県国際交流課長を務め、〇四年から再び岡山県へ来た。久しぶりの岡山は、国際貢献分野が著しく発展していた。全国の都道府県で初めて国際貢献条例が制定（〇四年）され、NGOや県民の活動分野・地域が広がっていた。この間、県は九六年に国際化推進プランをまとめ、国際交流から国際協力へと軸足を移した。〇二、〇三年には、明石元氏国連事務次長や菅波茂AMDA代表らがメンバーの「岡山発の国際貢献を考える会」で、県が取り組むべき方向を議論してもらった。その際、「貢献」ということで提言をいただいたのは、だれかが行う活動に力を貸す印象を与える「協力」ではなく、自ら主体となって取り組む「貢献」を目指すという気持ちが込められていたと感じる。提言を基にした条例では、地球の上に住む同じ人間として「だれかのために何かをしたい」という県民の思いを生かす形で進めていこうとしている。

■失敗に学ぶ

星野　国際貢献は、ニーズのあるところに援助の手を差しのべることが大事だと思うが、現場は外国なので、日本とは違う角度から問題を考えないといけない。失敗談も少なくないのではないか。

鹿嶋　日本で考えていたことは、スリランカの現場で全く通用しなかった。実験を伴う調査が目的だったので、昼に試料を採集し、夜に実験すればいいと考えていた。ところが、受け入れ先である国立保健科学院は午後五時半になると、職員が帰宅してしまう。津波被災者にアンケートをしても、予想とは全く違う結果が出た。違う角度から物を見ることが本当に大切だと思った。

仲田　カンボジアで小学校を建設した当初、教師には国から給料がほとんど支給されず、教師はアルバイトをせざるを得ない状況だった。このため、「授業に専念する」と約束してもらった上で、教師に月十ドルを支援することにした。また、奨学金をもらいながら勉強しない子が現れ、「他の子に悪影響を与える」と教師から問題提起があった。結局、一定の成績を収められない生徒の奨学金を打ち切ることにした。いずれも、現地の村人と意見交換を重ね、丁寧にニーズを把握したことが改善につながったと思う。

阿曽村　六〇年代、一億円規模の二つの無償援助事業に携わった。南ベトナムの住宅建設では、実行段階になって現地にコンクリート工場が無いことが分かり日本から送ることに。結局、コストが上がり、計画を縮小した。ラオスの港湾建設延長は、計画から着工までの三年間でインフレが起こり、コストが上昇。半年間は雨期で工事もできない。予算の次年度持ち越しは容易なことではなかった。大使時代には、ある国に工場の機材を無償援助したら、間もなく「工場を民間に売却したい」との知らせ。信義則に反するが協定書では合法。国際社会ではだまされる時もある。だまされた方が悪い。事前調査と注意が必要だ。

■プライド

星野　国際貢献活動は、相手のために何かをするという一方向のものになりがちだが、「皆さんは活動から何を得たのか。

菅波　援助を受ける側にも、自分が社会に認められたい、必要とされたいというプライドがあるというこだ。今回のジャワ島中部

鹿嶋　私にとっては友達ができること。今、ここにいる瞬間も、友達を通して、私がスリランカで見た現状が続いているという実感を持てる。菅波代表から「シンクグローバリー（地球規模で考え、アクト・ローカリー（地域で活動する）」という言葉をよく聴いたが、友達を通じて自分のローカルが増えて手と手と手のように一つにつながっていく実感を現場で得ることができた。

内野　自治体は長く海外技術研修員を受け入れてきた。単純に得意分野で受け入れればよいというわけではない。例えば、岡山県が桃栽培分野で研修員を受け入れても、その国では岡山の桃のような立派な桃の栽培は必要とされない場合があるからだ。岡山県では、途上国のニーズを直接把握しているNGOなどから提案してもらって、研修員を受け入れたり、指導者を派遣する仕組みを独自に作った。このような形で岡山から直接、途上国へ技術移転を行う事業は全国初だ。また、国際貢献に取り組む人がいる地域は元気があるように見える。人の出入りが多く、多様な価値観を受け入れ、生かせる地域のあり方が、活性化につながっているのでないか。

地震でも、AMDAのカンボジア、ネパール、マレーシア支部などに派遣要請をしたら、すぐに応じてくれた。人道援助は先進国の専売特許と思われがちだが、途上国の人にもプライドがあり、プライドを生かしたい。AMDAの多国籍医師団の根拠はここにある。国際貢献で一番大切なのは、他人の役に立ちたい意欲があるかどうかだ。